

Legends of Minamoto Yoshitsune in Kyoto, and the shadow of the Northeastern Region of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/560

京都の源義経伝説とみちのくの影

野崎 準

- 一 はじめに
- 二 京都における牛若丸の伝説
- 三 義経東下りにおける伝説
- 四 悲劇の生涯の史実と伝説
- 五 都とみちのくの義経像
- 六 終わりに

一 はじめに

源義経は源平の合戦に源頼朝の異母弟として参戦、木曾義仲を敗死させ、平家の滅亡に破格の活躍をしながら京都と鎌倉の板挟みとなり悲劇の最後を遂げる。そして死後まもなく多くの伝説がつけられ、それは近世、近代を通じて義経伝説として語り伝えられた。

義経にまつわる伝説については明治以後の近代歴史学の成立で史実とは切り離され、戦前は黒板勝美博士の『義経伝』によって歴史上の義経の姿が明らかになり(註一)、軍記物語、舞や謡曲に見える中・近世の人々にイメージされた架空の義経像、歌舞伎や物語に

よる近世から明治までのその発展は島津久基博士により『義経伝説と文学』としてまとめられた(註二)。さらに戦後の歴史学を踏まえ、特に「都とみちのく」の関連、文学上と史実の関係は高橋富雄博士が『義経伝説』として昭和四一年に出版された(註三)。

研究書は黒板博士の時代にすでに「汗牛充棟」とされ、戦後の歴史ブームに至り語り尽くされ論じつくされている人物であるが、東北人の視点から見ると、平泉への下向と滞在、最後まで同地という東北と都との関係をとりもつ人物である。筆者はこの「都とみちのく」を結ぶ人物としての視点から坂上田村麻呂と伊達政宗を論じたが(註四、五)、源義経についても「都とみちのく」の視点から、非力ながら考えて見たい。

京都に伝わる伝説は幸いな事に『京都叢書』なる編纂物があり(註六)、復刻版には精緻な索引が付いているので、江戸時代から明治初期の伝承から探索して見た。

(註一) 黒板勝美『義経伝』大正三年初版 中公文庫所収 平成三年

(註二) 島津久基『義経伝説と文学』昭和一〇年 昭和五三年京都大学堂書店復刻版による

(註三) 高橋富雄『義経伝説——歴史の虚実』中公新書 昭和四一年

(註四) 野崎 準「坂上田村麻呂と観音伝説」東北学院大学東北文化研究所紀要 第四六号 平成二六年

(註五) 野崎 準「都の奥州武将」東北学院大学東北文化研究所紀要 第四一号 平成二二年

(註六) 『新修京都叢書』全二五巻 臨川書店(昭和四二年〜平成八年)

『京都叢書』は大正四〜六年に刊行され、昭和八〜一〇年に補足を加え二十巻として『増補京都叢書』が、昭和四二年に図版・索引を加えた『新修京都叢書』が出版された。『新修』は索引の訂正に時間がかかり完成は平成八年となった。以下引用の『京都叢書』はこの『新修京都叢書』版に依る。

二 京都における牛若丸の伝説

源義経と京都との関係があるのは、幼年の牛若丸時代と、木曾義仲追討から平家を滅ぼし、頼朝に追われるまでの京都滞在の二時期である。本章では牛若丸時代について述べる。

(一) 幼児時代

義経の母常盤(常葉)は源義朝の妾で今若、乙若、牛若の三児を産む。平治の乱で義朝が戦死してから常盤は三児と共に流浪し、捕われるが平清盛により赦免、大藏卿一条長成と再婚した。三児は出家させられ、今若は醍醐寺で出家し禪師公全濟(全成)、乙若は八条宮で卿の公円濟、牛若は鞍馬山東光坊阿闍梨蓮忍の弟子禪林坊阿

闍梨覚日の弟子となり遮那王と称した、と『古活字本平治物語』の終り近く「牛若奥州下りの事」にある(註七)。

この時代の牛若丸については同時代史料がなく、最も古い伝承がこの『平治物語』であるが、いつの時代の追加であるかも不明であるという。

その牛若丸誕生の地は現在の京都市北区、大徳寺の東北に「牛若町」があり、『名所都鳥』(註八)に

産湯水 愛宕郡

京の北紫竹村大徳寺の末寺大源庵の方丈の庭に有。むかし源の義朝この所に住給ひ すなはち常盤御前爰にて牛若を産み此水を汲で産湯とするゆへの名也。

と見えるのが古い伝承である。

「都花月名所」(註九)には

源義経誕生水 今宮大源庵

「山城名跡志」(註一〇)には

源義経誕生所【紫竹村南今宮東有 大徳寺塔屋之一也 此内有古井世伝此井義経誕生水旧跡云々】

異本義経記云大夫判官伊予守従五位下源義経母八九条院ノ官婢常盤ナリ 平治元年洛北紫竹ニテ生レルと云々

(以下引用文中の【】は割註、()は筆者註を示す。人名、地名の当て字は原文のままとした)

「山州名跡志」(註一一)には
常盤第

此所今宮ノ東紫竹ニ到ル左方人家ノ地ナリ。常盤ハ義経ノ
母。始メ九条殿ノ雜司ニテ無双ノ美女也。此人紫野ニ居住ノ事
双紙物語ニ載ス。此館ニテ牛若誕スト云フ。(二部読み下し)

また

義経産水ノ井

在同所人家北。清泉ナリ。

弁財天社



図版一 京都市北区牛若町
義経産湯井戸址



図版二 牛若町
牛若丸誕生井の碑



図版三 牛若町
牛若丸誕生の地、右遠方が朧衣塚

井ノ傍南向ニ有。此所義経ノ朧衣ヲ蔵ムトイフ。
などとあり、江戸時代前期にはこの地が牛若丸誕生地とされてい
ようである。



図版四 京都時代祭
牛若を抱く常盤御前と今若・乙若

現在は牛若町の道路沿いに「源義経産湯井ノ遺址」という大正一五年十月、紫竹土地区画整理組合建立の石碑があり、

「此ノ地ハ源義朝ノ別業ニシテ常盤ノ住ミシ所ナル。平治元年義経誕生ノ時此井水ヲ産湯ニ汲ミ来タトノ伝説アリ」以下、後に大徳寺塔頭大源院の敷地となり竹林となったが大正十四年紫竹区画整理で消滅したので、後昆(後世)に備え記録する、とある(図版一)。

この碑の西の畑地に小さな塚と古井戸があり、ここにも「牛若丸誕生井」の石碑がある(図版二、三)。説明板があり、「元弁財天社の一部。牛若丸胞衣塚と産湯の井戸、後方畑の中の小さな塚が胞衣塚で応永二年の碑がある」旨記されていた。ここが「山州名跡志」に見える弁天社の跡であろう。接近した二地点であるが、誕生の地

そのものが伝承であるから真偽を論じるレベルではないだろう。『平治物語』では平治元年二月九日に常盤に抱かれて清水寺から山科を経て大和に逃れたとあり、雪の中を今若・乙若を先立てて逃げる姿は京都人の好みなのか平安神宮時代祭にも登場する(図版四)。また大和に逃げる途中用いたという「常盤の井」や平家に捕えられた地という伝説が伏見区にある。

(二) 鞍馬山時代

牛若丸は「鞍馬寺の東光坊阿闍梨蓮忍が弟子禅林坊阿闍梨覚日が弟子となりて遮那王とぞ申しける」が、十一の年に出生の事情を知り、平家討伐を志し、昼は学問を、夜は武芸を稽古し僧正谷で天狗から兵法をならったと『平治物語』にある。

「京羽二重」(註二二)に

僧正谷

鞍馬山の奥西のかた也 不動明王示現の地にして牛若丸兵法剣術を伝授せし所也

「都名所車」(註二三)には

鞍馬寺

いにしへ源九郎義経此山に居給ひ平家をほろぼしたく毘沙門天に祈誓をかけ給へば たもんでん(多聞天) あはれと思召て僧正坊をもて兵法を教へさせ其後も平家の一類をつぶして願成就せり 僧正が谷本堂の西の方也。此谷にて剣術ありし所といへり 義

經の太刀弁慶錫杖吉次兄弟鎧甲其外色々の宝物有

「洛陽名所集」(註一四)には

僧正谷

鞍馬寺の西のかたなり 此所にて源義経未だ牛弱(うしわか)

なりし時 異人に偶会し刺撃(劍戟)の法さまざまならへるとな

り 今に義経の劍甲など其外珍器どもおほかめり 是につたへて

此所に天狗とて有となんかたちしなじなかへ出現しけるとぞ

蚩尤旗星の義にあらず まず僧正を巨魁として愛宕山の太郎

比良山の次郎 伊都奈の三郎 富士の太郎 上野の妙義坊 常

陸の筑波法印 彦山の豊前坊 太山の伯耆坊 大峰の善鬼 今平

六 比叡山の法性坊 肥後の阿闍梨 葛城の行者高間(たかま)

坊 高雄の内供奉 如意嶽の天狗といへる類多し…(下略)

と、日本独特の「天狗」の解説も記されている。

「出来齊京土産」(註一五)には

(鞍馬山) 僧正谷

僧正谷は鞍馬山の奥西のかたにあり 源義経いまだ牛若丸とい

ひし時 あやしき人に逢て兵法をならひしと也 今も義経の太刀

甲 その他色々の什物あり

此所は大天狗僧正坊の住所といへり 是を魁(かしら)とし

て…(各地の天狗、略)

今の世の僧にはせめて天狗になるべきもあるべからず 名利に

おちいり行法をおこたり学徳もなく文盲愚癡にしていたづらに施物をつるやす これみな死しては地獄におつべし しからずば牛馬と生れなん まことにあさまし

と、当時の僧侶への皮肉も載せている

『日次記事』の作者黒川道祐の遺稿で明治になってから出版された「近畿歴史記」(註一六)には

(鞍馬山) 靈宝ヲ一覽ス 源義経ノ太刀並ニ具足ハ奇怪ノ物ナリ 古ノ法眼元信ノ画ケル縁起並ニ義経ノ像 天狗ノ像 目ヲ驚カセリ(中略)

貴船ニ赴ク北ノ内ニ僧正谷アリ 相伝源義経少年ノ時寓東光坊 日々此ノ谷ニ下リ大天狗僧正坊兵法ヲ授リシ処ナリ 種々ノ岩石アリ 土人義経ノ事故説ク

山城の枕詞「つきねふ」から題名をとった北村季吟の「菟芸泥卦」(註一七)には

僧正谷 鞍馬山寺の西四五町計奥に有 僧正は天狗の名なり 源義経牛若丸とて此寺の東光坊阿闍梨のもとに兎なりしほど 毎夜この谷にて僧正に劍術を習ひ給へり 其太刀痕とて其谷の石に痕つけり

とあり、僧正谷の岩に義経劍戟の傷があるとしている。

「近畿歴史記」の追補(註一八)はもう少し考察して

(鞍馬山)

霊宝ヲ一覽ス 源義経ノ太刀並具足ハ奇怪ノ物ナリ 古法眼元
信画ケル縁起 義経像 天狗像 目ヲ驚カセリ (中略)

貴船ニ赴ク 僧正谷アリ 相伝 源義経少年時 偶東光坊日々

此谷ニ下リ大天狗僧正坊ニ兵法ヲ伝シ所ナリ 種々ノ岩石アリ

土人義経ノ事ヲ説ク：(中略)：方解石・等ノ付合ナリ

と、牛若の付けた傷でなくこの地域の岩石の特徴だと言っている。

「山州名跡志」には

僧正谷(鞍馬山)

八所社西北十町余ニ在リ。牛若背競石右路傍ニ在リ。是ヨリ

下リ坂。太郎坊社僧正谷南向ニ在リ。此所牛若丸剣術ヲ琢磨ノ

所ナリ。総テ此所岩洞尋常ニアラス。石面剣刀ヲ裁ルガ如シ。其

中 挑石(クグリイシ) 陰石(カクレイシ) 抛石(ツカミイ

シ) 足駄石 硯石 水入石 等アリ。

などとある。

現在の鞍馬寺では「九十九折」登山路の由岐神社の上に石造宝塔
があり「源義経公供養塔」とある(図版五)ここが「東光坊跡」の
伝承地であるとか。また僧正谷には「義経背競石」がある。

「京羽二重」に

せくらべ石 名石

鞍馬山僧正谷にうしわか丸せくらべ石とてあり また北山矢背

のさと道のかたはらに弁慶がせくらべ石とて今にあり



図版五 鞍馬山 源義経供養碑

「名所都鳥」に

背競石

鞍馬寺 僧正が谷に牛若丸せくらべ石とてあり。

又北山八瀬の里に弁慶がせくらべ石あり。これははじめに出す

弁慶石の事なり。

とある。

現在「背くらべ石」とされるのは高さ一・二メートルほどとある
から、子供時代とはいえ小柄だったのだろうとか。

室町時代になるとこの時代を舞台にした「天狗の内裏」なる物語

も生まれる(註一九)。牛若丸時代の義経が鞍馬山中で天狗の内裏

に侵入し、地獄を見学、無事往生したのか大日如来となった父源義

朝と再会、前世の宿命によりこれからの生涯は、平泉に行き兄の挙兵に参加して平家を滅ぼして本懐を遂げるが、讒言によって三十二で死ぬ、と告げられる。そして「汝の前世は虫で多数の鳥に食われた。その鳥が転生して平家の武士になっているから辻斬りして倒せ」などと殺人教唆を受け、千人斬りを始めた…とされている。出家を約束させられながら父の仇を討ち平家を滅ぼしたいと願った、という牛若の心情を汲んだ物語だろうか。

(三) 武蔵坊弁慶との出会い

鞍馬寺時代に牛若丸は武蔵坊弁慶と知り合い、主従の約を結んだとされている。弁慶は島津博士が昭和十年に「日本のキングコング」(米映画『キングコング』の日本公開は昭和八年)と言われたほどの怪力無双の人物で、正史にはほとんど登場しないが、物語では平家討伐の諸合戦や義経の逃避行にも大活躍し、平泉で義経最期の時に「立往生」したとも、実は義経と共に生存し蝦夷地に去ったとも言われている。室町時代に既に「弁慶物語」が数種類書かれており(註二〇)、この注釈だけでも研究書数冊を著しても論じつくせないほど伝説で一杯の人物である。また古い絵草紙類や絵馬に画かれる時肌を黒色に表現される事、全身が鉄で覆われていたが「弁慶の泣き所」だけは肉身だった、などの伝説から大林太良博士はアキレス、ジークフリート、平将門など世界的に分布する「全身が鉄で覆われていた神」の一人とされていた(註二一)。

室町物語の弁慶の物語は出生、修業時代、播磨国書写山を焼き

払った事など、義経の従者になる前の物語が中心である。

二人の出会いの場所は多数考証されているが、清水寺、五条大橋(現在の五条大橋とは別の場所)、五条天神社、北野天満宮などが語られている。

「都名所図会」(註二二)には

五条天神社

此安元元年 源牛若丸鬼一法眼の兵書の遺恨ありて戦ひ 忽ち感応を得て打勝し 此所又武蔵坊に逢ひしも此森也

鬼一法眼の話は後世のものだが、室町物語では京での話となっている。

「京町鑑」(註二三)には

松原道

此道古の五条通也 古は寺町より四五町西へ松の並木有しとぞ 故に松原といひならはせり 源牛若 弁慶と出会ありも此松原也 古の橋杭今にのこれり

京都の弁慶ゆかりの遺跡として「弁慶背競石」があり、北山八背(京羽二重織留)、「雍州府志」の巨岩という。また中京区には「弁慶石町」があり、「弁慶石(図版六)」が残されている。

「京町鑑」にまた、

弁慶石町



図版六 弁慶石 中京区弁慶石町

此町に元弁慶石あり ゆへに小名とす 此石の由来さまさまの記あれども怪しければここに記さず。此石今は誓願寺の方丈の庭にあり

また「京羽二重」には「七条のにし水薬師の内 此石いにしへはくらま口にありしがある年の大洪水にながれて三条御幸町弁慶石町といふに有し 其後此地に引とすと也」

とあり、「名所都鳥」には「七条の西水薬師の内也。此石いにしへはくらま口にありしが、ある年の大洪水にながれて三条御幸町弁慶石の町といふにあり そののち此所へひき取しとあり。水薬師のほとりならば葛野郡のうち也」、「山城名勝志」には「今三条通京極西

曰弁慶石町。編年号運図曰 享禄三年 奥州弁慶石入洛 置京極律寺 或年代記云 享禄元年七月十六日衣川弁慶石三条京極入洛」と、確かに「由来さまさま」で、場所も変わっている。「京都坊目誌（註二四）」は諸説を整理し、明治二五年に現在地に移されたとしている。

現在の説明板は主に「京都坊目誌」に依ったよううで、平泉衣川館で弁慶の寵愛した石、鞍馬山から持参した石、弁慶は若いころこの近くに住んでいた、などの諸説を記している。また「洛中洛外屏風」の中にこの石を若者の力試しに用いている絵がある。

（註七）永積安明・島田勇雄校注『保元物語・平治物語』日本古典文学大系 三一 岩波書店 昭和三六年（一九六一）

（註八）「名所都鳥」六卷八冊 作者不明 元禄三年（一六九〇）『京都叢書』

五

（註九）「都花月名所」一巻一冊 秋里離島 寛政五年（一七九三）『京都叢書』

五

（註一〇）「山城名勝志」乾坤 二一巻三〇冊 大島武好 正徳元年（一七一

一）『京都叢書』一三・一四

（註一一）「山州名跡志」乾坤 沙門白慧 正徳元年 『京都叢書』一五・一

六

（註一二）「京羽二重」七巻六冊 作者不明 宝永二年（一七〇五）『京都叢書』

二

（註一三）「都名所車」一巻一冊 正徳四年（一七一四）作者不明『京都叢書』

五

（註一四）「洛陽名所集」一二巻二二冊 山本泰順 万治元年（一六六〇）『京

都叢書』一一

（註一五）「出来齋京土産」 浅井了慧 延宝五年（一六七六）『京都叢書』

一一

〔註一六〕「近畿歴史記」所収「東北歴史記」 黒川道祐 原稿、出版明治四

三年（一九一〇）『京都叢書』一一一

〔註一七〕「菟芸泥封（つきねふ）」 八巻九冊 北村季吟 貞享元年（二六

八四）『京都叢書』一一一

〔註一八〕「近畿歴史記」追補。註一六の巻末に収録。

〔註一九〕「天狗の内裏」『室町時代物語大成』巻九 角川書店 昭和五八年

所収

〔註二〇〕「弁慶物語」「井の草子」など 『室町時代物語大成』巻二 角

川書店 昭和五九年 所収

〔註二一〕大林太良「本邦鉄人伝奇」『季刊民話』二 昭和五〇年 他

〔註二二〕「都名所図会」六巻六冊 秋里離島 宝永九年（二七八〇）『京都

叢書』六

〔註二三〕「京町鑑」二巻二冊 蘆田純永 宝暦四年（二七〇七）『京都叢書』

三 〔註二四〕「京都坊目誌」碓井小三郎 大正五年（一九一六）『京都叢書』一

七一一

三 義経東下りにおける伝説

（一）出 発

父の仇討に平家討伐の野心を抱いた牛若丸は陸奥の国の藤原秀衡を頼って鞍馬山を脱出し東北に向かう。手引きをしたのは砂金商人「金売り吉次（橋次末春）」で、その館は現在の上記区智恵光院通今出川上ル桜井町の首途八幡宮の地とされている。

「京羽二重織留」に

橋次が井

西陣五辻の南さくら井の辻子にあり 伝云金売吉次末春が宅地なりと 此井大にして水あまた清冷なり

源のよしつね橋次にしたがひてあづまにくだりし時に此地より首途（かどで）したまふと也

「名所都鳥」にも

橋次が井 愛宕郡

西陣 五辻の南 桜井の辻子に有 これ牛若をとまひし金売商人橋次末春が屋敷の跡也。

此井大きにして清（すめり）。奥州下りの首途の時も此所より出てもむかれたり。又妙心寺の東にある屋敷の跡ともいひ門出の水というふは大きにあやまれり。それはむかし官家木辻氏の新館なるを橋次と訛囀したる也。

妙心寺付近の「木辻」の井戸が誤伝であることは「京羽二重織留」にも見える。

「雍州府志」（註二五）には

橋次井

在西陣五辻南桜井辻子 相伝此処賣金商橋次末春之宅地也 此井大而水又清冷也 源義経從橋次東行時自此処首途

又妙心寺南門東有木辻村是古官家木辻之領所 而干今有第宅之跡 土人誤木辻為橋次 村中一箇井亦号出門（かどで）之水 是義経首途日所用之井也云 皆是謬伝也



図版八 首途八幡、石段の上に社殿がある



図版七 橋次の井戸、桜井公園

現在は「京都五水の一、桜井、一名吉次の井」とされる井戸形の湧泉を中心とした桜井公園（図版七）と、その西の古墳状の盛り土上の首途八幡神社（図版八）からなっている。

角田文衛博士はこの地を陸奥国の荘園から都の貴族たちに貢納物を運ぶための出先機関「平泉第」と推定された（註二四）。角田博士は本書でまた、牛若丸が秀衡を頼った理由についても、陸奥守、鎮守府將軍を務めた後平泉に滞在し、その娘が秀衡の妻・藤原泰衡の母であった藤原基成と、常盤が再婚した一条長成はともに権中納言藤原長忠の子孫という関係で、この過激思想の少年を平家から護るため相談の上、平泉に赴かせたのでは、とも考証された。

（二）蹴上の伝説

吉次と共に奥州に旅立った牛若丸にまつわる地名起源伝説がある。京都市街から東国に行く道筋はいくつかあるが、旧東海道は三条大橋から栗田口を経由して東山を越え、山科に向かう。道路が山道にさしかかる所を「蹴上（けあげ）」といい、現在は地下鉄蹴上駅がある。

「京羽二重織留」に

蹴上水 下粟田口にあり。九郎よしつね牛若たりし時、鞍馬山を出、かね商人橋次末春にしたがひ東におもむく時此所にて関原與市にあふ。與市は美濃の国の軍士にして馬に乗り京師に入る、與市が郎党あやまりて此水を蹴上でよしつねの衣を汚しぬ。よしつね其無礼を怒り與市が郎党数十人をきりころし、猶又與市が耳

はなをそいで追いはなつ。牛若東行首途の吉事なりとよろこびた
まふと云々

また

血洗池 霊地

下粟田蹴上の水の辺にあり 伝云 いにしへ源九郎義経牛若た
りしとき此所にて関はら與市に逢ひて與市が家人数十人斬ころし
其太刀を此水にてあらひたまふと也

「名所都鳥」には

蹴上の水

下粟田に有 源の義経牛若ときこへし時 くらま山を出 金売
橋次と、もなひて奥州にくだる 爰にて関原與市に逢 與市はみ
のゝ国の住人なりしが京へ来るに郎党数十人 此所の水をあや
まて蹴あげ義経にかゝる 其無礼をいかりて切あひしたり 終
に與市が耳はなをそいで追はなつ まことに門出よしとよろこび
て下られける 今此水をあやまて関の清水といふもの有 関の
清水は天津の西 おいわけに有

「雍州府志」には

蹴上水

在下粟田 源義経為牛弱(うしわか)時 出鞍馬山從賣金商
橋次末春而東行 於茲逢関原與市々々美濃国之士也 騎馬入京
師 其從者十人 意氣揚々然列行 誤蹴斯水汚義経衣 義経怒其

無礼 抜刀斬從者十人 殺與市之耳鼻 而放之 義経喜以為東行
首途之吉兆也 今誤斯水称関清水 関清水在近江国大津之西 追

分東

また

地(血)洗池

義経斬與市 從而後洗刀処也

「山城名勝志」にも

蹴上水【在粟田口神明山東南麓 土人云関原与一重治被討所】

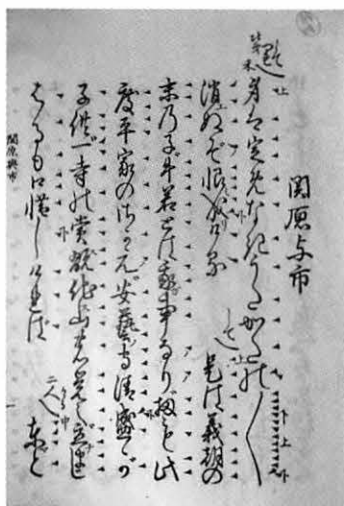
異本義経記云 安元三年初秋頃 美濃国ノ住人関原與市重治ト
云者在京シタリ 私用ノ事アリテ江州ニ赴タリ 山階の辺ニテ御
曹司ニ行逢 重治ハ馬上也 折節雨ノ後ニテ蹄跡ニ水ノ有シヲ蹴
掛奉ル 義経其無礼ヲ咎テ及闘争 重治終討レ家人ハ逃去ヌ。



図版九 蹴上の義経大日



図版一〇 山科区御陵血洗町
義経血洗いの池伝承地



図版一一 喜多流謡本
「関原と市」

「近畿歴史記」「京都坊目誌」にも簡単だが同様の記事がある。蹴上の清水は今所在不明だが、琵琶湖疎水インクラインの上端近く、疎水工事殉難者慰霊碑と並んで「義経大日。関原と市とその家

来の供養仏」と称する石仏がある（図版九）。実際は鎌倉時代の阿弥陀石仏である。また伝説では蹴上の近くだが、現在は日岡峠を越えて山科に下りた所に山科区御陵（みささぎ）血洗町があり（図版一〇）、ここに義経血洗池の跡と、隣接する京都薬科大学運動場内に「義経腰掛石」がある。御陵の地名から分かるように天智天皇山科陵の南である。

これも正史にない話で、島津博士は「舞『鞍馬出』、謡曲『関原と市』が出典、熊坂長範伝説と同様競勇型勇者譚に属する競武型かつ闘戦型説話」としている。謡曲『関原と市』（註二五）では與市は美濃国中山で牛若と出会い、「七十騎」の屈強な郎党もろともこの少年に全滅させられ、馬を奪われたと話の規模が大きくなっている（図版一一）。

（三）その他の東行にまつわる伝説

平泉に向かう途中、『義経記』では近江鏡の宿で吉次の隊商を襲う盗賊団「出羽の由利太郎、越後の藤沢入道、信濃の佐久太郎、遠江の蒲與市、駿河の興津十郎、上野の豊岡源八ら二十五人の盗賊」と闘い、由利太郎以下五人までの首を取った。その後尾張国熱田神宮で元服し源九郎義経と名乗ったとある（元服も鏡の宿で行ったとする物語もある）。

この物語が脚色され、大盗賊熊坂長範と牛若丸との戦いになり、また「山中常盤伝説」といい、鞍馬を出た牛若を追ってきた常盤は熊坂に殺されており、牛若は知らずに母の仇を討ったという伝説に

もなっている。史実では『吾妻鏡』に常盤は義経逃亡後も生存していた事が見られるのであるが。

牛若成長・東下りの段で語られる伝説には辻斬り、蹴上での虐殺、強盗団退治と血なまぐさい話が続く。島津博士は「競勇勇者譚」としておられるが、兵法書の入手などその後の短くも華々しい木曾・平家討伐の超人的な活躍を合理化するためであろうか。

東への旅を続ける義経には、さらに「三河安城で病死するが薬師如来の化身浄瑠璃姫によって蘇生させられる」話がある、愛知県岡崎市には「浄瑠璃姫の供養塔」(図版一二)がある。また都に戻り、軍学者鬼一法眼の秘蔵する兵法の書「虎の巻」を入手する話もあるが、いずれも都・みちのくとは関係がない話である。室町物語の『判官みやこばなし』では平泉から都の鬼一判官の元に軍学を学びに来た義経は「奥州は平泉のいわて、くりはら山の者にて候」と名乗る。



図版一二 岡崎市浄瑠璃姫
供養塔

都で適当な地名を引用して創作したと想像できる名乗りである。

なお「虎の巻」の入手については室町時代の物語に「御曹司島わたり」がある(註二八)。もとは江戸時代の成立とされていたが、文亀・永正ごろの成立とされる「天狗の内裏」に「鬼の大王から兵法の虎の巻を奪う」話が出ており、中世に遡る物語と判明したと言う。平泉滞在中の義経が、鞍馬天狗の太郎坊に「蝦夷が鳥きけん城の鬼の大王が兵書『虎の巻四二巻』を所持する」と言ったの思い出し、四国土佐国から高麗航路の船を一隻買い取り、馬人国・女護島・小人国・かしま島(裸国)などを流浪の末「えぞが島」に至り、相模国江ノ島の弁財天の化身「朝日天女」の助けで鬼の大王の秘伝書を複写、「牛頭馬頭阿房羅刹」の追撃を振り切って「とさのみなど」(津軽十三湊?)に戻る話である。島津博士は「義経地獄廻り(天狗の内裏)」同様に中国の説話や、あるいは南蛮人により伝わった西欧の伝説が影響していると考証されている。義経が笛の魔力で危機を脱する話をオルフェウスに、異形の鳥めぐりをスイフトの『ガリヴァー旅行記』(初版は一七二六年なのでその原形)とも比較しておられるが、筆者には「百合若大臣物語」の如くオデッセイの影響もあるのではと思われた。

(註二五) 雍州府志 十卷十冊 黒川道祐 貞享三年(一六八六)『京都叢書』
一〇
(註二六) 角田文衛「平泉と平安京——藤原三代の外交政策」『奥州平泉黄金

の世紀」新潮社とんぼの本 昭和六二年（一九八七）

（註二七）謡曲 喜多流『関原與市』明治三二年訂正再版、明治四三年三版による

（註二八）『御曹司島わたり』（仮題）『室町時代物語大成』三、角川書店 昭和五〇年

四 悲劇の生涯の史実と伝説

（一）平家追討の戦い

治承四年（一一八〇）四月に発せられた高倉宮以仁王の平氏追討の令旨が諸国に届き、以仁王戦死の後にも諸国の源氏が続々旗揚げし、伊豆の源頼朝も挙兵、平泉の義経も奥州の兵を引き連れ黄瀬川で兄頼朝と面会する。

『義経記』では秀衡が和泉冠者に命じて陸奥・出羽の軍勢を集めようとしたが義経は「遅れてはいけない」と三百余騎を賜り、兄の元に向かう。

興味深いのは三百騎を「馬の腹筋馳せ切り、脛の砕くるをも知らず」強行軍させたので伊達の大木戸を越えて行方原（西白河郡）に至った時は百五十騎に減っており、「百騎が十騎にならんまでも打てや者ども、後を顧みるべからず」と速度をゆるめず、武蔵にいたときは八十五騎に減っていた、とある。

頼朝はこれに「我らの先祖八幡太郎義家」が二三年の合戦（後三年役）で大敗した時、弟の新羅三郎義光が職をなげうち駆け付けてくれた時の喜びに「いかでか勝るべき」と喜ぶのであるが、義光は

「二百余騎にて下られる路次にて勢打ち加わり三千余騎にて厨川に」来たと言っているのは義経の落伍者放棄の強行軍をさり気なく批判している言葉で、『義経記』成立の時には義経の戦い方がこのような伝説として人々に膾炙していたと考えられる。

無事頼朝と面会した義経はしばらく鎌倉に止まり、寿永二年（一一八三）、蒲冠者範頼と共に鎌倉勢を率いて上洛、木曾義仲を近江粟津に敗死させる。

高橋富雄博士はこの前後の『玉葉』『吉記』を引いて都の貴族たちが範頼より九郎義経の方に深く興味をもっていると指摘されたが、出自や少年時代の都での挙動から、坂東武者より組みやすい人物と目されていたのであろうか。

都に入った義経は直ちに寿永三年（元暦元年）正月二十九日に都を出、二月に一の谷、翌寿永四年（文治元年）二月には四国に渡り牟礼・高松・屋島で平氏を破り、三月二四日には壇ノ浦で平家を全滅させてしまう。息を突かせぬ追撃また追撃の鮮やかな勝利であるが、同時に関東武者の反感を買ったのは、平泉から黄瀬川までに三百騎が八五騎になるような、平氏はおるか関東武者も辟易するほどの、騎馬隊の速度を最大限に利用した戦法であったからであろうことは先学の注意する所である。

これが名馬の産地、北方ユーラシアの狄馬（てきば）の技術も取り入れ、蝦夷の時代から騎馬隊を主力として広大な東北の山野を駆け回っていた「みちのくの騎馬戦法」なのだと考えたいのだが、如

何であろうか。その後中世を通じて、或いは北畠顕家や伊達政宗が都とその周辺で見せた東北の騎馬隊の威力も義経伝説の脚色に力があつたのではないだろうか。

(二) 堀河夜討と逃亡

文治元年(一一八五)、三月に壇ノ浦で平家を滅亡させた後京都に戻った義経は一月も立たずに頼朝と不和になり、急遽鎌倉に下向して「腰越状」を頼朝に送るも許されず、十月一七日には鎌倉の刺客土佐房昌俊の夜討ちを受けた。京都の滞在地は武家源氏重代の館であった六条堀河といい、現在の下京区佐女牛井(さめがい)町の周辺とされている。醒ヶ井は名水で知られたが堀河通拡張で道路の



図版一三 佐女牛井跡
堀河館の跡とされる

下となり、現在は石碑が残るのみである(図版一三)。

「京雀」(註二九)に

楊梅(やまもも)町

油こうちを西へ入町よりさめが井通までのあひだに六条ほり川の御所とて九郎判官義経すみ給へり。堀川夜打は此所にて侍りとかや。

「京羽二重」に

源義経古館

楊梅(やまもも)通の北あぶらの小路のにし口に六条ほり川の御所とて九郎判官よしつねの住み給ひし御所あり。土佐坊打手に上がりし堀川夜討も爰の事也。今竹藪茂り其跡ばかり残れり。

「京羽二重」にまた、

源義経古館 旧地

楊梅通の北あぶらの小路のにしに六条ほり川の御所とて九郎判官よしつねのすみ給ひし御所あり。土佐坊打手に上がりし堀川夜討も爰の事也

「京羽二重織留」(註三〇)に

武蔵坊居所

伝云 二条河原の東南にあり いにしへ弁慶よしつねにしたがつて京都に侍るときは此所に住居すと、土佐坊主正俊よしつね

堀河の屋形をせむる時も弁慶馬を馳せて此所より趣しなり 今に
此所農業をせずして荒地なり 世に弁慶が芝と号す。

弁慶芝については「名所都鳥」にも

弁慶芝 愛宕郡

二条河原の東南に有。むかしむさし坊弁慶 義理(原文ママ)

にともなひ京に来る時 まず爰に居宅をかまふ。此地いまにたが
やさず。

同様の記事が「雍州府志」他にも見えるが、現在はどこか不明であ
る。

「京町鑑」に

金仏下町

油小路の西醒井の南 昔源九郎判官義経の御居館有し 土佐坊

正俊討手に上京して一戦ありし 世に堀河夜討といふも此所の地

(下略)

他にも、微妙に位置が違っているが堀河五条から六条にかけての地
が堀河館となっている。また「京羽二重織留」などには四条猪熊に
「義経太刀掛松」があるとしているが、これは細川頼有の墳墓だと
されている。

夜討ちに失敗、弁慶に詰問されて嘘で逃れ、最後は捕えられ処刑
された土佐房昌俊(土佐坊正尊)は謡曲『正尊』となって人々に知

られていたのか、

「京町鑑」に

中金仏町

此辺古云 (土) 佐坊昌俊頼朝公の御上意を請義経の討手に上
りし時の旅宿有し旧地也

「日次記事」(註三一)には

十月二十六日

土佐坊昌俊忌【東鑑曰 文治元年十月十七日夜侵入堀河源義経
之館……】敗北。鞍馬山ノ宗徒捉エ此ノ日六条河原ニテ誅サレル。

また「京雀」に

四条通 祇園御旅所

又この御旅所の南のかたに西向き小社あり、世にいひつたふ是
は土佐坊正尊が社也。そのかみ頼朝の仰に依りて九郎判官義経の
打手にのほり此事露見して六条堀川の御所にめしよせられ、義経
の前にて打手の使にあらずくま野まうでのため也といふ起請文か
きたり。主君の御ために罰をかへりみずおそろしき起請文かきけ
るは忠ありといへどそのむくひにや正尊つひに義経の館に夜うち
していけどられころされたり。かの起請文をものうき事におも
ひ、今は神といはれて世の人の起請文の罰の身かはりに立へし
といへる。願ありとにや此故に十二月大晦日の日は京中の商人空
証文のほどこしに此社へまうでていのりまいらするといふ。

「日次記事」には十月二十日に

四条京極冠者殿社参詣

俗ニ伝フ 此ノ神偽盟ノ罪ヲ免レシム故ニ商賣此社ニ詣テ欺キ
売ルノ罪ヲ被フ故ニ今日参詣ス。(中略)

世ニ或ハ土佐坊昌俊ト、昌俊ハ義経ノ前ニ於テ追討ノ使ナラズ
ト偽リテ誓フ 此ニテ神罰ニ因リ殺サルル故ニ他人ノ偽誓ノ罪ヲ
救フト。未ダ然リヤ否ヤヲ知ラズ。

と、弁慶に迫られて熊野牛王の裏に偽の証文を書いたため、死後阿
鼻地獄へ落ちたが、偽証文の罪を免除する神になったとある。四条
通りの拡張で移転し、いま八坂神社御旅所の西の「冠者殿社」がそ
れであると言う(図版一四)。



図版一四 土佐房昌俊を祀る冠者殿社
左は祇園御旅所

後白河法皇より兄頼朝の追討の院宣を受けた義経は大物浦から西
国に逃れようとして遭難、吉野に逃げ、以後平泉にかくまわれてい
る事が判明するまで姿を消す。『吾妻鏡』には潜伏先の探索、母常
盤の取り調べ、静御前の物語などを記録し、伝説は大物浦沖での平
家の怨霊を弁慶の祈りで退散させ、吉野からの脱出、山伏に変装し
ての安宅の関での物語など多彩である。

義経に奥州から従った佐藤継(嗣)・信・忠信兄弟のうち兄継信は
屋島の戦いで義経を庇って戦死、弟忠信は義経脱出後、文治二年九
月二〇日六条堀河館で鎌倉勢と闘い切腹するのであるが、

「京羽二重織留」に
佐藤忠信屋敷

七条の坊門ふどう堂の東南にあり(中略)此所耕作せずして荒
地なり 忠信一男子あり 成長の後坊門三郎と号す 凡 武家に
ありて坊門と名乗りするはおほくは是佐藤が苗裔也

「京都坊目誌」に

佐藤継信忠信の址

中御門東洞院二在り。今其所を知らず。

また二人の供養塔が馬町(現在は京都国立博物館内に移転)にあ
ることも「都名所図会」などに見える。最後まで忠義を貫いた家臣
として評判が高かったのであろう。

(三) 義経自害とその後の伝説

文治三年(一一八七)平泉にたどり着いた義経は臨終の藤原秀衡から後事を託されるが、鎌倉と京都からの譴責厳しく、五年閏四月に義経一党は高館で殺害される。

「日次記事」に

四月晦日

義経忌【於奥州衣川館自害】。武蔵坊弁慶忌。

と、都でもその最後は語り継がれていた。

藤原泰衡は義経の首級を鎌倉に送るが、前九年役以来奥州の支配を武家源氏の悲願としていた頼朝は当然許さず、七月鎌倉軍が進発する。

平泉藤原氏は名だたる馬所である陸奥国を支配し、室町物語には「秀衡十八万騎、関東三十二万騎」(「天狗の内裏」)などと関東武者と互角に戦える兵力とされていたが、義経亡き後は「百騎が十騎にならんまで」の強行先制攻撃もかなわず、伊達郡厚樫山の防衛線が崩壊すると敗走、泰衡は鎌倉に助命を嘆願して部下に殺され、他はなす術もなく降伏し、同年九月には平泉政権は崩壊してしまった。京都の研究者には藤原氏三代の平和な時代が続いたので、平泉軍には源平両氏のような戦闘力はなかったのだらうと評されている

(註二二)。

島津博士は『義経伝説と文学』(註二文献)の第二章「義経に関する主なる諸伝説」の最後に「蝦夷渡伝説」を取り上げられ、「生脱型伝説」即ち非凡の英雄の末路が不明の場合に「実は生きていて」と語られる伝説であるとして、衣川で自害したのは影武者の杉目行信、弁慶と義経は脱出して北海道に渡り、さらに韃靼に至り金国の將軍となった、という伝説を紹介されている。そして北海道の伝説は金田一京助の調査により、近世の日本人が伝え、ユーカラに登場する「英雄と怪力の従者」に当てはめた物、と判明。そもそも義経蝦夷地渡海伝説は江戸初期以前にはない。大陸へ渡ったとする説の根拠となる「金史別本列将伝」なる書は江戸時代の贋作、「義経はジングスカン也」説に至っては明治一八年の珍説。と明快に論破された。

なお同書は、江戸時代の「義経生存説」を本気で取り上げて東北の遺跡を探索したのが仙台藩の『奥羽観蹟聞老誌』『義経事実考・付録』であるとされている。

『奥羽観蹟聞老誌』(註三三)巻一七の「事実考」はこれらの説による「義経勲功記」、「金史別本列将伝」を詳細に紹介し、明治の『補修編』でも青森県三厩の「義経の馬を繋いだ岩屋」、竜馬山義経寺を紹介し「義経此の地より蝦夷島に渡れりと伝ふ」と真面目に論じているが、これらは悲惨な最期を遂げた英雄への鎮魂伝説に過ぎなかった様である。

(註二九)「京雀」六卷六冊 中川喜雲 明暦四年(一六五八)「京都叢書」

(註三〇)「京羽二重織留 六卷六冊 孤松子 元禄二年(一六八九)『京都叢書』二

(註三一)「日次記事」十二卷十二冊 黒川道祐 延宝四年(一六七六)『京都叢書』四

(註三二)上横手雅敬「源義経の生涯と色々な見方」『今なせ義経なのか』

上横手雅敬編『源義経——流浪の勇者』文芸堂 二〇〇四(平成六年)

(註三三)佐久間洞庵『奥羽観蹟聞老誌』『仙台叢書・奥羽観蹟聞老誌・下』

昭和四年

五 都とみちのくの義経像

「東を向いた都」平安京には東國、それも最果ての陸奥・出羽との関わりをもつ人物の伝承が多いと気が付いたので、その代表者として坂上田村麻呂や、東國の武者たちを探索したが、文献も多く、過去に様々な研究もされている源義経についても、伝説中の人物に注意し、主に京都の地誌、名所案内に見える記事からまとめて見た。

歴史上の義経は記録が少ないが、源平合戦の最中に鎌倉勢の中心として突然登場、都で政権の基礎を固めつつあった平氏を短時間に滅亡させてしまい、しかも勝利者の栄光も一瞬で兄頼朝との不和により逃亡、異境の地で悲劇の最後を遂げる。史料上で不明な時代も多く、悲劇の主人公としては恰好の人物、しかも都人からの武家政権への批判も籠めることが出来るためか、史実とは関係なく「」

地」名所が創作され、育てられていったことがうかがえた。

従来義経伝説には、地方で作られ成長した物語が都で書き換えられ記録された部分がある、という見方と、全て都の人々が創作したという見方があった(註三四)。いま都の伝説を見る限りでは、もとは地方で創作されたと断定できそうな話は見当たらない。意外なのは室町物語のように地域の交流が鎌倉時代以前より豊富になった時代にも、都で語られ記録された物語は都での創作が中心であることである。

今一つ気が付いたのは義経本人よりその側近の武蔵坊弁慶、佐藤継信・忠信兄弟、退治された関原與市、熊坂長範、土佐坊昌俊(正尊)などの脇役の物語が都では意外に発展し多くの関連する名所やその物語を残している事であった(註三五)。

(註三四)高橋富雄博士は柳田國男「東北文学の研究」で「地元の人でない」と書けないから地方で創作された」とされた部分は「義経記」や「吾妻鏡」で十分書くことができる。全て都で創作された物語だ、と考証しておられた。(註三文獻)。

(註三五)前述のようにこの調査は「新修京都叢書」の詳細な索引を利用していただいで資料を集めたのであるが、「牛若丸、九郎判官、源義経、武蔵坊弁慶」などだけでなく、この周辺の人物たちについてももっと検索するべきであった。

六 終わりに

都とみちのくを往復して活躍した人物の代表が源義経であるが、史料にあまり登場せず、短期間に目覚ましい活躍で人々を驚かせ、悲劇の最後を遂げた一生が人気を呼び、以後数百年に渡り多くの伝説に取り巻かれている。京都では「みちのく」との関連人物として語られているが、あまりにも大きな人物像で取り上げる機会はないと思っていた。しかし『京都叢書』に収録されている近世の名所案内・伝説紹介だけでもこの人物をさまざまに観察できると考え、図書館で該当部分を筆写、パソコンでデータベースを作成して様々な視点から追いかけた所このようにまとめることが出来た。

物語の中にも都とみちのくの関係があるが、記録されたものは地方から都に語り伝えられた話より、都から想像して創作されたらしいものが多い事は、時を経ても都人にとって「みちのく」は遠いあこがれの地であったことを示しているようである。

関心のあった最大の人物である源義経についての物語を、過去にない視点から探索しようと考えていたが、京都叢書を利用して以上のようなまとめが出来た。今回も多くの方々から助言、資料の提供を頂いたことを衷心から感謝する次第である。

(平成二十七年八月二〇日)